第３章　柴田武先生を囲んで

目次

第１節　柴田武先生のお話
第２節　柴田武先生との話し合い

第１節　柴田武先生のお話

甲斐ム　それでは，これから柴田武先生に，国語教育についてのお話をしていただきます。時間は１時間程ということでお願いしてあります。その後，柴田先生にお話しいただいたことについて，もっと詳しく知りたいことなどを，ご質問申し上げるということで，１時間程を予定しております。柴田先生には２時間ほどですけれども，どうぞよろしくお願いいたします。

柴田　　柴田でございます。失礼します。今，私が何者かという紹介もありませんでしたけれども，私がこうして，教育と名の付く場所にいることは，実に不可思議なことでございます。私が出てくる場ではないということを，重々自覚していたのですけれども，甲斐さんがぜひ出てこいということで出てきました。何かたくらみがあるのかもしれません。あるいは私は素人だから，素人の意見も聞いてみようということなのかもしれません。私は小学校・中学校・高等学校，そのいずれの段階の教壇に一度も立ったことはございません。私は教員免許状は持っているのです，中学校の。持っておりますけれども，どこへいったのか見あたりませんし，もう人生も終わりですから利用することもございません。

そういうわけで，教育の現場をいっさい存じません。もっとも授業参観といいますか，何かお話ししたあとに，公開授業というものがありまして，拝見したことは，もちろんございます。あるいは，今日は日本語教育も含めてというお話ですから，日本語教育についても，国際基督教大学で，朝から夕方まで同じクラスをずっと拝見しましたし，名古屋大学でも一日，午前中から午後遅くまで，ある特定の一日の日本語教育の様子を拝見したことがあります。しかし，それはやはり，あくまでもよそから見ているだけのもので，私自身が何かするということではありません。日本語を個人的にさえ教えたこともございません。そういうことですから，教育については全くの素人，門外漢でございます。

しかし，事柄によっては，玄人になればなるほど，ものが見えなくなる傾向もあります。しかも，保守的になる，伝統に忠実になりすぎるという傾向が非常にあります。ですから，私のほうの言語学の学問にしましても，専門家であればあるほど，何かやはり新しい局面が開けない。そして今までの歴史を見ましても，心理学者やあるいは英語学者，つまり素人，門外漢が言いだしたことが新しい分野を切り開いてきたという歴史があります。それに相当するという意味ではありませんけれども，私という素人の発言にも何かご参考になることがあるかと思ってやってきました。講演ではございません，起承転結のある話ではございません。雑談を申し上げたいと思います。また素人ですから，自由にものが言えるのではないかと。幸いに私は今，いっさい宮仕えをしておりませんので，どこにも気兼ねはありませんので，私の考えていることを率直に申し上げてみたいということでございます。

それから，教育には全く関係がないと言いましたけれど，実は高等学校の国語の教科書についてはかなり深く関係したこともありますし，今もある教科書の代表者に名を連ねておりまして，小学校についても同様でありますから，形式的には国語教育に対して少しの責任を感じております。今日はその自己批判も少ししたいと思っております。

それに私は言語学を，この国語研究所にいるころから研究を始めたのですが，ことばをモノとして見て，その組立て，構造，そういうことの分析もですけれども，それよりはことばが，人間との関係，つまり社会との関係でどう使われているか，あるいは地域的にことばがどういうふうに対応しているかというようなこと，つまり言語社会学とか社会言語学と言われるようなこと，あるいは言語地理学とか地理言語学とか言われるようなことをやってまいりましたので，どうしても人間というものをいつも意識してまいりましたので，そういう意味で教育についての発言を思わずしているのかもしれません。そこを甲斐さんは掴まえまして，ときどき教育についてお書きになっているではないかということで，その責任も果たす意味で今日，出てまいりました。

話しことば教育がことばの教育

さて，最近よく話しことば教育ということがクローズアップされているそうです。しかし，私が見るところ，これは成功しないと思います。それは根本的な枠組みを変えない限り成功しない。と言いますのは，どうも話しことば教育というのは音声教育の段階にとどまっているのではないかと。高等学校の段階で言うと，教科書は教科書の形にしにくいものですから，適当に朗読の資料をＣＤか何かの形にして添えるというようなことでお茶を濁す。そんなことはよせと言うのですけれども，そういうものをつけないと売れませんから，大変無駄といえば無駄なことをしていると私は思うのです。音声教育ではなくて話しことば教育，これは私から言えば，ことばの教育。ことば教育ということであれば，まさにそれが話しことば教育であると，私は考えております。国語教育がことばの教育だというと，「国語」を「ことば」と言い換えただけではないかとお考えになるかもしれませんが，全体にどういう枠組みでこのことばを捉えるかということで違ってまいります。私の見ているところは，日本の国語教育というものはことばの教育をしていない，していますけれども，非常に弱い。何をしているかというと，まず小学校では文字教育だと思います，重点は。そして高等学校は文学教育です。中学校は何かと言うと，きっとその中間だと思います。こう申し上げると，すぐ反論が出てきそうです。文字もことばの一部ではありませんかと。文学だってこれは言語で作った作品ですから，やっぱりことばではないかとおっしゃるでしょうけれども，そういう意味のことばとしてのことばの教育と言っているわけではございません。

アイウエオから始まる文字教育・音声教育

まず，小学校が文字教育だということを具体的な例で申し上げます。これは自己批判になるのですけれども，実は昨日こういう教科書が届きました。これはある出版社の教科書，そしてこの監修者の一人は私なのです。ですから，形式的には私が今日言ったことは自己批判になるのですけれども，実際には「監修」ということは何もしないという意味です。あるいは，何もさせてくれないという意味です。かつてはこの会社の教科書は，原稿ができた段階で，一年から六年まで全部目を通していろいろコメントをしたことが何度かありますけれど，そういうことはきっと煙たいのでしょう。最近はで

きてから来る。何か言おうにも，もう間に合わない。この来たばかりの教科書をを見ますと，教科書の最初のことばが「青い青い春の空，歌え歌え春の歌」ですが，小学校一年生がそんなこと言いますか？このきれいな絵を見て，子供たちはきっと「気持ちいいな」「気分いいな」「今日は春だな」「遊ぼうっと」というようなことを声に出すと思います。こういう子供の叫びを捉えていないのです。子供の心を察すると，これではよそよそしいです。楽しい読本にはなりません。このよそよそしさが教科書に必要なのでしょうか。そのねらいは，文字を数えると同時に「春の花，青い青い春の空」で五十音図の音を教えようとしているのだと思います。「青い青い」に実はアイオの三つが出ているのです。また，「歌え歌え」には，ウとエがでて，これで全部アイウエオが揃ってしまう。次のページを見ると，アイウエオの表がある。日本語のことばの構造は，皆さんご存じのように，子音と母音のくりかえしです。例えばカラダというと，k が子音でa が母音，r が子音でa が母音，d が子音でa が母音というように，子音があって母音，子音があって母音，そのくり返しです。ココロということばも同じで，こういう形のことばが日本語として一番典型的な形だということは皆さんご存じの通りです。ところが，よりにもよってアオイは欠陥日本語です，子音がない。アもオもイも，母音だけで子音がない。こんなに母音だけが３つも続くことばはめったにありません。よりによって珍しい日本語で始めたものです。そういうことばですから，方言でいろいろと変化します。水谷修さんや私は名古屋の出身ですが，名古屋では「アオエ」と発音する。構造が不安定なんですね。カラダやココロということばは，名古屋弁でも決してなまらない。沖縄まで行くとククルとなまるのですけれども，沖縄をのぞいて日本全国なまられない。よりにもよってこういうアオイということばを最初に出すことは，本当に口に出して発音させる配慮があるとは思えない。意図は，早く文字を教えるよう，五十音図を教え込もうというところにある。

小学一年生の国語教育

殊に一年生の時の国語教育のあり方，これは私の子供が今や五十とか四十とかの，おじんやおばんになっていますけれども，彼らが小学生のころ私は何回か授業を見に行きました。ちょうど私の家の真ん前が小学校なものですから，ずいぶん煙たがられながら，研究のためと称して見学してきました。それで多少そのころ，三十年前くらいの状況は少し心得ているつもりですけれども，考えてみると，子供たちは六年間，正確には五年間くらい，母親の元で日本語を勉強してきています。その勉強してきた日本語は，教室では全く利用されません。いきなり全国共通語といいますか，東京語のようなものを多少あやしげな東京語を使って教えられる。つまり，英語を英語で教えられているような状況がある。それは東京の場合は教科書のことばと子供たちが勉強してきたことばと，そんなにくい違いません。地方の場合は，その土地のことばを勉強してきたのに，小学校へ入ったとたん，全くそれは問題にされません。そのことばを口にすれば笑われます。先生も話しません。話題にもしません。方言を蔑視するということは，明治以来の政府の方針だったわけですし，国語教育はそれに大いに加担してきたという事実がある。これは，しかし，考えてみると，無駄なことをしていると思います。英語をわれわれが勉強する場合に，はじめから英語ばかりで受ける授業もありますけれども，文法の説明などはやはり日本語で説明を受けたほうがいいように，子供たちも全部が全部，全ての部分が必要だとは言いませんけれども，ある部分は子供たちのことばで説明してやることが，まさにことばの教育だと思うのです。最近も私は小さな本を書きましたけれど，その中に桃太郎の話を書いたのです。「おばあさんは川へ洗濯(せんたく)に行きました」私たちが習った大正の終わり頃の教科書にも「洗濯(せんたく)に行きました」

と書いてある。ところが，私たち名古屋の方言では「せんだくに行きました」です。そのときの教室の場面を思い出すことはできませせんけれども，おそらく先生あるいは生徒は「おばあさんは川へせんたくに行きました」と読んだに違いない。「せんだくに行きました」ともし読んだとしても，先生は「間違い，せんたくだ。」と言って注意したに違いない。そして教育したはずです。しかし，その結果なんの効果もありませんでした。今でも，名古屋では「せんだく」で「せんたく」とは言いません。それに私は先生から「名古屋ではせんだくと言うけれど，東京ではせんたくと言うよ」という情報はもらわなかった。私が気が付いたのは大学に入ってからです。東京へ来て「せんだく」と言ってはおかしい，「せんたく」と東京では言うらしい。では少し変えようかなというわけで，今，「せんたく」は用意に口をついて出てくるようになったのです。実は標準語教育は共通語教育であり，方言教育なのです。それがことばの教育だと私は思うのです。

先生はその土地の方言で教育する。そんなことを言っても現場ではできない，先生の出身地がそれぞれ違うから。例えば名古屋のことばで，それも，非常に古い，始めから終わりまで名古屋の方言的なことばでしゃべるのではなくて，子供たちが育ってきた六か年くらいの，その時代の名古屋の普通のことばという意味ですが，そういうことばを先生が使えなければおかしいというのです。それでなければコミュニケーションができないはずです，子供と。「そんなことを言っても，私は東京出身だから名古屋弁なんて。だいたいあんな汚いことばを，しゃべれるものか。」と先生方は思っているかもしれません。私は，それは先生として失格だと思う。事実，ドイツでは，小学校の先生になるための大きな条件は，そこの方言が話せるということなのです。ですから『正しいバイエルン方言の話し方』という本があるのです。これは明らかに先生の試験の虎の巻です。考えてご覧なさい。日本で『正しい津軽弁の話し方』という本を書いてご覧なさい。１冊も売れません。ですから，日本では難しいということはわかっていますけれど，全くできないことではない，ドイツではやっている。日本でも昔は小学校の先生は，だいたいその土地の出身者で，頭はいいけれども家庭はあまり裕福でないというような若者が師範学校へ行った。月謝がただでしたし。そういう人達がだいたい自分の故郷へ帰って先生になった。そしてその人達が教育をする。これは非常に素直な形で，ドイツではそれを法律で決めてしているわけです。ですから，日本でもできなくはないと思うのです。これは根本的には，ドイツが連邦制であるということや，ドイツでは標準語についての考え方が非常に日本と違う。中央集権的ではありませんから，簡単に日本と比較することは注意をしなければいけませんけれども。ＮＨＫのドイツ語の講座がありますが，あれを一度ご覧になるといいと思います。出てくるチューター，ドイツ人がドイツ語の発音を提供します。「俺はミュンヘンだ」「俺はバイエルンだ」と，全く方言で発音するのです。彼らはゲマイシュプラハー（共通のドイツ語）ということを気にしません。考えてご覧なさい。日本の津軽の出身者がアメリカへ行きます。ちょうど日本語講座がテレビである。「おまえちょっと出てくれ。」そのときに津軽弁でやりますか？　きっとあやしげな東京語でするでしょう。そのときに，俺は津軽だから津軽弁でやる，というような，ことばに対する態度はないと思います。そういうことがバックになっているのですけれども，私は６年間の子供たちのことばを充分に利用すべきだと。ですから，ある担任に，私はたわむれに，小学校の一年生の授業をやらせてくれないかと頼んだことがある。ダメだと言われました。「おまえは小学校の免許状がない。」よく話したら，助手ならいいと言うのです。では，やらせてくれ，と言いまして，実は少し実現しかけたのです。けれども，いろいろな都合で実現しませんでした。私は本当に，こんなことができるかどうかについて自信はありませんけれども。

文学教育と並ぶ言語教育を

さて，小学校は文字教育に重点を置いたことで始まって，今度は高等学校に来ると文学なのです。私はもう少し文学は遠慮したらどうかと言うのですが，現実には言いにくいのです。なぜ言いにくいのかというと，編集委員の先生はみんな文学なのです。文学が好きだから国語の先生になっている方ばかり。ですから，それを減らされるのがいやだ，ということがありまして。また，教科書を決めるのは，実は，子供でもなく父兄でもなく，先生が決めるのです。決める先生が文学の先生です。やはりそういう形にしないと，教科書は成立しないということです。私はやはり，高等学校において文学も結構です。しかしまだ，ことばとして，どうしても世の中で身につけておいてほしいことばの能力というものがいくつもある。私が多年，編集関係で主張していて，一回だけ少し実現しましたけれども，全く実現しないことがございます。それが何かというと，世の中へ出たときに法律的な文章を読む力を持っていたら，世の中でかなり得をする，少なくとも損をしない。その能力，法令文は難しいということが評判になっていますけれども，難しいのではなくて，やっかいなだけの文章なのです。確定申告の印刷物などをご覧になっていると思いますけれども，易しいのです，内容は。しかし，こういう場合はこうだ，こういう場合はこうだと，いろいろなあらゆる場合を尽くして述べている。全部を読むと頭が混乱する。だから法律の文章は読まない，人に任せる。人に任せてもいいが，損をしていることに気づいていない。損をするのはただ経済的な損だけならいいのですけれども，生命や自分の存在について損をするということがありますので，ぜひ法律的な文章を，能力をつけてやりたいと思ったのです。もちろん，教科書の中に憲法の一部分を入れるとか，確定申告の１ページを入れろなど，そんな無粋なことを言っているわけではございません。あるいは，「以内」と「以上」のことばの違いを学習させるというような，そういう個々の情報について考えているわけではありません。もう少し理屈を追って，やっかいな文章を読んでいく能力を子供たちにつけさせておきたいということなのですけれども。一回だけ成功したのは，皆さんはご存じかどうか知りませんが，横田喜三郎という人が，『国際の民主主義』という短い文庫本を出ている。実際には長編の研究物があるのでしょうけれども，私の読んだのは文庫本です。それは，国内に民主主義がある。それを，国と国との間にも民主主義を確立することができるし，それが望ましいということを，いろんな場合を尽くし，いかにも法律家らしい論理を積み重ねている。易しい言葉で，小説みたいに面白くはないのですが，それを諄々と説いていくという文章。これはある年に，三十年も前のことですが。教科書に載りましたし，私は成功したと思います。なぜ成功したかという証拠は，その後ある教科書会社がそそくさと教科書を１冊作ったのです。間に合わないものだから，各教科書でめぼしいものを集めて１冊作ったらしいのです。その中でこの『国際の民主主義』を採録したいという断りが来たのです。そのことは，現場ではどうなのか知りませんけれども，見る人がいて，これはいわゆる論理的な説明文として，適当なものと判断された方がいたのだということを知ったわけですが，たったそれが一回だけのこと。後はそういうものがでてきませんし，みなさんはあまり興味がないのですけれども。これはいわゆる評論だけではなくて，ある意味では実用文という種類のものではないかと思います。

貧弱な一品料理をそろえた文学教育

文学教育についてもう少し脱線して申し上げますと，これは日本人の特色ですけれども，文部省の検定方針も少し効いているのかもしれませんが，主な文学，殊に古典になると，どれもこれも少しず

つ出さないと気が済まない。やはり源氏も少しはやらなくては。枕草子も出す。つまり，非常に貧弱な一品料理がたくさん出てくる。これが本当に古典の文学教育になっているのかどうか非常に疑問に思うのです。むしろ源氏をやるのは難しいでしょうから，他のものをある程度たっぷりやる。だから，二つ三つすることで，そこでつけた読解力で，源氏を自分で好きであれば読むという方法もできるのだと思う。これは日本人の特徴で，後で話題に出る，あるトルコ人の話ですけれども，彼は三カ月だけ大学で日本語を勉強して，すぐ日本人のガイドをやったという。どうしてそういうことができるかということは，後でお話ししますが，その人から，日本人をガイドして得た感じを教えてくれました。彼は語学が達者なので，日本語だけではなくてスペイン語もドイツ語もフランス語も，いくつかの言語ができて，どの言語のガイドもやるのです。例えばスペイン人のスペイン語を話すグループのガイドをやった場合と，日本語を話すグループのガイドをやった場合とでは，全然違うというのです。スペインのグループは，スペインとは限らず，ドイツもそうだそうですが，どこかきれいなところへ連れていってほっておきますね。30分経っても一時間経っても文句が出ないそうです，スペイン人やドイツ人からは。日本人はどこかへ連れていくと，10分もしないうちに「次はどこですか？」という質問がすぐに来る。日本人はたくさんのところを，ともかくぐるぐる回らないと満足しない，そういうことがわかったと言う。だから説明などは，どうでもいいのだそうです。つまり，さっきのお粗末な一品料理をそろえるという我々の文化的な特徴をつかれたみたいで，なるほどそう言われてみればそうだと感心しました。日本人にとって，あそこへ行った，あそこへ行った，ということがみやげ話になるということ。

達成感を伴う学習

　そういう教育の仕方も，あってもいいかもしれませんけれども，やはり本当に古典の文章を読める力，ことばの力をつけるのには，英語や数学と全然違う点があります。つまり漢文でも国語でも達成の喜びがないのです。つまり，数学は非常に低い段階から積み重ねていく，前に習ったことは後に引いてくるわけです。ここまで行ったという達成感。殊に古典を扱う場合には，これは一種の外国語ですから，例えば係り結びのことを覚える，そういう能力をつけておいて，その上で，さらに「な来そ」のような文章に挑戦するというふうに，いまの教科書はできていません。こういう作品も出さなければいけない，これもとりあげなければとばかり，料理はきちんと揃っていますけれども，では最初に出てくるのは易しいかというと，必ずしもそうではない。易しいだけではなくて，基本的な能力を身につけるのに役立つ文章を含んだ作品ではない。英語の勉強でも皆さんがお考えになればわかりますように，達成の順位というものがある。こういうことを日本の古典語の教育についても，考えなければいけないのではないかと思うのです。ですから，これも最近の本に書きましたけれども，私は中学校・旧制高校時代，国語と漢文の授業は一番嫌いでした。本には，暗黒の時間と書きました。なぜならば国語の授業を聞いていますと，例文よりも説明のことばの方が難しいのです，だいたい。もちろん私の受けた教育環境は，非常に劣悪だったせいかもしれませんけれども，今のような達成の喜びがない。ともかく，むやみやたらと記憶をするのです。旧制高校の国語の先生でさえそうでした。その先生は枕草子でしたけれども，朗々として口語訳にしていくわけです。生徒のほうは一瞥もしません。それは実に見事な訳なのです。説明はいっさいない。試験の時はそれを丸暗記して書いて，記憶がいいほど点数がよかった。この時間に勉強したことは，今の私に，なんの役にも立っていません。そうではなくて，例えば古典語では主格の助詞は使わないのだと，「雨が降る」ではなくて「雨降る」と

いうことを教えられた覚えがない。体格の助詞(「を」)は，ある場合とない場合があるが，その区別について教わった覚えがない。その説明が正しければ，自分の方言との類似にも気づいて，一気に古典は身近にやってくるというものです。漢文にいたってはもっとひどい。ある文を「こういうふうに読めませんか？」「いや，昔からこう読んでいるのだ」という一言でした。だから，別の返り点の可能性を考えさせない。ともかく，朱子学が教えるように，そっくりそのままともかく記憶するだけなのです。そうではなくて，こうも読める，ああも読めるというものが漢文の読み方ではありませんか。しかし，昔の人はこう読んできたということを教える。なぜ，こう読んで，そうは読まなかったのか，そんな説明があれば，漢文の時間も暗黒ではなかった。数学や，英語に見合うような達成の喜びを授業に与えてほしいという気がいたします。

ことばあって文字がある

ところで，最初からお預けになっておりました「ことばの教育」についてですが，ここに示す枠組みは，何も私の独特のものではありません。言語学で考えているごく普通の考えであります。ことばというものは音(おん)と意味，あるいは音声と意味と言ってもいいです。あるいは形式と内容と言ってもいいのですけれども，その二つの連合したもの，あるいは連合することと考える。つまり音を聞けば，雨ならば「アメ」という音を聞けば，雨を思い出す。あの空から降ってくるものを表すのには，「アメ」という音で表さなければいけない。それがことばだ。ことばはもちろん単位によって，いろいろ文や語，それらに当てた，広く言って図形みたいなもの，視覚的な刺激物が「文字」だという考えがある。世には，音声と文字を対立させて考える考え方もある。これは表したいことを聴覚刺激的なもので出すか，視覚を刺激するもので出すかという表現手段の違いということで分離して対立させる。ここには「意味」がない。意味と連合しなければ，ことばにはならないと思います。その意味を表すものが「ことば」で，その「ことば」を表したものが文字だと考えるのです。だから，文字は二次的なもの，付けたしなもの，あってもなくてもいいものです。世界には文字を持たない民族というものがたくさんあります。日本のアイヌ語も，ついに文字を持たないで滅びようとしております。文字がないから滅びたのか，そういうわけではない。文字のある国でも，一生を文字なしで終わる人もいます。しかし，その逆はないのです。ある高名な方ですけれども，その人があることばの雑誌で，論文の最初の出だしが「私はことばのことでは素人だけれども，まずことばは文字」と出てくるのです。あるいは文法，最後には音声がある。私の考えと全く逆です。それはなぜかというと，その人は自然系の人で，工学方面の方。たしかに情報処理のことを考えれば，まず文字について成功した。ワープロが一番いいお手本です。それは，文字を他の文字に転換する道具です。しかし，まだ音声を文字に転換することはできていません。その順序を考えて，その方は，まず，ことばは文字だとお考えになったのだと思います。きっとこれはその先生お一人の考えではなくて，エンジニアリングの世界ではかなり普通の考えではないか。いや，国語教育の現場でもそれに近い。「いや，日本は特殊だ，漢字があるから。」では，通らないと思います。

四書五経的講義をやめよう

いまの高等学校では文学ばかりやるのではなくて，ことばの教育をしなければいけないというのが，われわれの主張ですが，ことばといえば，世の中に出ると，教科書に載っているような正しく美しい

文章ばかりではないのです。へたくそな文章，回りくどい文章もある。それを大量に読まなければいけない。ところが，今の国語教科書を見ていますと，そういう能力をつけようとはしていないみたいです。教科書の編集に際して，ある文章を採用するかどうかについて議論するのに，「これは易しすぎるから教科書には採らない」と言うのです。これは一番私の納得できないことです。易しいならば，早く読む練習に当て，内容について議論したらいいではないかというのですが，ざっと読むなどということは今の教室では考えられないようです。どうも，いまだに四書五経の教育が行われているのではないか。最初から，ひとことばひとことば説明する。どこかで見た先生はすごいものでした。教科書をそのまま写して，いちいち，これは名詞，これは助詞，と書いていくのです。それを生徒が，黙々と書き写すだけ。これは文法教育でも何でもない。教科書はいろいろ制約があって，そう自由なことはできないのですけれども，相当な分量を早く読む。何が書いてあるか，それに対して意見を言う。そういう教育ができないものか。散文詩みたいな文章であれば，そういうものは何度も声を出して読む。この意味はどうだとか，ひとことばひとことばやればいいと思う。全ての文章についてそういうやり方でやったのでは，教科書を１冊終えることはできません。現実に教科書を一冊，始めから終わりまで全部やる現場はないそうです。殊に言語単元はたいてい無視される。お飾り教材なら，もう言語単元はやめようと言ったことがあります。大学で教えていた時に，英語で書いた言語学の文献でしたけれども，ゼミナールで読もうと言って採用したのです。そして１ページくらいのところで議論が始まる。それは，内容ではなく，英語についてです。「先生，このthatはどこにかかるのですか？」

試験で鍛えられてきた東大の学生は，試験のベテランです。そこで，「俺は英語の教師ではないのだ。言語学を教える。何が書いてあるんだ，それについて議論しよう。」ですから，いっさい私は英語については答えなかったのです。こういうやり方だと，１年かけても１冊の本さえ読めません。こういう四書五経的な教育をやっていたのでは，社会へ出てから文字情報を個人的に処理するのに大変なことになる。情報は機械が処理すると言っても，最後は人間が関与してきますので，そういう段階で四書五経では太刀討ちできないだろうと思います。つまり，スキミング，斜め読みの能力ということも非常に必要だろうと思うのです。今日お話しすることは全て，長年主張してきたけれども実現していないことばかりです。私は非常に敗北感を30年ほど味わってきております。

教科書の親切は仇になる

それから教科書のことに及びましたからもう少し教科書についてお話ししますと，今の教科書は，国語でも英語でも，注がやたらに親切です。文部省の検定意見の中にも，ここへ注をつけた方がいいだろうと注意を受けることがあります。英語の教科書は，語彙集が完備しております。注が多いほど，語彙集が完備しているほどその教科書は売れるとすると，その結果どういうことになるか。生徒達は辞書を引く必要がないのです，全く。教科書だけやっていればいいのです。国語はそうはいかないかと思いますけれども。ですから，極力，私は注を減らして「不親切な教科書」を，と言っているのですけれども，これも実現しません。その注がときどき間違っているということになれば，親切が仇になります。そういう教育の結果，どういう学生ができたか，これは具体的な名前を挙げて申し上げます。うちの長男が慶応の理工学部で教えております。理工学部の数理科学，数学や統計学をやっておりますけれども，そこへ去年ある学生が入ってきた。その学生と話をすると，英語の辞書を今まで一回も引いたことがないと言うのです。それで，うちの息子は驚いて，「すごい学生が入ってきている」と。「どうして慶応はそんな人を入れたのだ」と，私は言ったのですけれど。それは考えてみると，

全ては教科書にある。試験を突破するには辞書など引いていられないのですね。

辞書引けなくとも大学生

私はＮＨＫ交響楽団の会員なのです，もう40年くらい。そして毎年一回お金をはらうのです。これは先月の話ですけれども，会場でお金をはらいました。ちゃんと書類があって，それに私の名前が書いてある。座席の番号もちゃんと書いてある。それを見せもしたのですが，カードボックスから柴田のカードがなかなか出てこない。大学の学生のアルバイトと思われるのですが，サ行のカードボックスには100枚ほどのカードがあって，そこから柴田を捜すのですが，なかなか出てこない。見ていると，彼女は，サ行の最初から１枚１枚見ているのです。きっとサ行の中もアイウエオ順に，つまり，サシスセソの順に並んでいるのでしょう。シだったら，まず少し真ん中より前くらいのところで見るくらいのことをすれば，なれれば２～３回の行き来で出てくるはずです。それが出てこないのは，辞書を引いたことのない大学生なのでしょう。いや，これからは機械でやればいい，人間より機械の方が間に合うということになるかもしれませんけれども，そんなわずかなカードについて，何も機械検索をする必要はないと思います。こういうことについても，とうとうアメリカ的なレベルにまで落ちてきたという感じです。私は15年ほど前にハワイにまいりましたときに，旅の途中でトラベラーズチェックを，私のものと家内のものとを一つにしようと，銀行の窓口で頼んだのです。完了するまでに何時間かかったと思いますか？２時間半でした。11時ごろに窓口に出したら，いろいろ計算しているうちに，12時になった。窓口は１時間お休みです。今度は１時に行くと，もう一度計算のし直しをして，結局，受け取ったのは１時半でした。その銀行へ案内していったハワイ大学の先生が「アメリカはこれだからダメなのです。」と言っていました。今やアメリカも日本もの時代になりました。一時，大学の入学試験によく五十音図を書けという問題が出ました。私は最初に見たときにびっくりしました。これは小学校の試験問題ではないか，大学の試験問題で出たのです。その意味がやっと分かりました。やはり必要なのです。サの次は何だ，シの前は何か，それができないような生徒は採るべきではない。辞書を引く癖は，若いときにつけないと一生ダメです。辞書の仕事を一緒にしましたベテランの見坊豪紀さんは，自分の作った辞書ならば，任意のことばを探すのに，３回指を動かすだけで出てくるのです。例えば，「尊敬」ということばを探すのには，辞書のちょうど半分ぐらいのところを開く。そこには，タかソで始まることばが並んでいます。これは，目標より少し後ですから，ほんの少し前を開く。すると「損」が出てくる。そこで３度目に数ページあとを見ると「尊敬」が出てくる。見坊さんにはかないませんでしたね。私は５回は必要です。今のアルバイトのお嬢さんだと，最初のアから引いていくわけですから，ページ数の２分の１と同じ回数めくらなければなりません。

ディベートの能力も

さてもう一つ，これは高等学校の段階だと思いますけれども，話しことば教育，あるいはことばの教育の非常に高い段階で，つまりディベート，日本語に直すと討論となりますけれども，ティベートの能力がこれからは必要になる。おまえは反対論をやれ，おまえは賛成論をやれということで議論をさせることが一部で行われております。つまり議論のための議論です。これができないと，これは国際社会では必ず敗北です。議論は人間抜きで話せないのです。あいつは気にくわない男だから反対し

てやろうという反対論はできても，理論だけのための反対論を展開していくことは，日本人は不慣れである。ＮＨＫの外郭団体に放送研修センターというものができておりまして，自分のことばを録音して送ると，アナウンサーがなおしてくれる，それを商売にしているわけです。そこの中にいろいろなセクションがあるのですが，最近ディベートを入れるようになりました。これは一つの進歩ではないかと思います。ドイツではそれだけで番組を作っています。小さい机を真中にして二人が議論をするだけのもので，よくもこれで番組ができるものだと感心しました。ドイツ人は少しいきすぎだと思います。理屈が多すぎると思います。それに対して，われわれは少なすぎます。そういう議論をするときに私たちは，「と，思います。」とか，「と，考えられます。」とかよく言うのですが，これは議論の途中では使えないはずのことばです。ある結論が出たときに初めて「と思う」「と考えられる」ならいいのですけれども，途中に「と思う，したがって」というこれは，絶対に言えないことなのです。「と思う」くらいのことで「したがって」とはおかしいではないですか。「何々である。したがって何々である。そして最後に，と，こういうふうに思います。」こういうものが全体をつつんでいる自分の主張である。ですから，私たち日本人が英語を話すときに，Ｉ thinkということばをよく使いますが，これはあやしい意見という意味なのです。自信がないときにI thinkと言うのです。日本の論文を見てご覧なさい。始めから終わりまで「と思われる」「考えられる」です。本当のディベートをするのには，われわれの言語習慣で変えなくてはならないことが出てくる。議論していても，やはり丁寧に言おう，相手のことを考えよう。理論のための理論，理屈のための理屈を展開していくことがわれわれにとって難しい。

国語教育の目標

ここで先ほど会の始まる前から，指導要領のことを言っておりましたので，そのことをちょっと申し上げたいのですが。ここには中学校のものを持って来ておりますが，小学校も同じですけれども，細かいことはさておき，その目標にこういうことが書いてあります。もう頭の中に入れていらっしゃる方には無駄かと思いますけれども，念のために，読んでみましょう。「国語を正確に理解し適切に表現する能力を高めるとともに，思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにし，国語に対する認識を深め，国語を尊重する態度を育てる」とあります。私は全文にわたって何かコメントをしよう，あるいは批判しようというのではありません。最後のところの，国語教育の，目標として「国語を尊重する態度を養う。」とありますが，いったい「国語を尊重する」とはどういうことでしょうか。具体的にどういうことでしょうか。尊重するのはモノです，相手は。人間だと尊敬と言います。中国では，最近はどうか知りませんが，字の書いてある紙は踏みつけてはいけないのだと聞いています。今でもそうでしょう？　それは存じませんが，昔の中国のように文字の書いてあるものを足で踏みつけてはいけない，などが，ここで言う尊重でしょうか？　そういうことはわかるような気もするけど，そうではないみたいです。これはなんでしょうか，私にはわからないのです。それで自分の外に国語というものがあって，それを尊重するというのですから，大事なモノを時々拭いてやるとか，水で洗うとか，そういうことでもありません。非常に大事なものだから，ちょっとやそっとではことばを口にしてはいけないという意味でしょうか，黙っていろということでしょうか。そういうことではなさそうです。わからないのです。おそらくここには国語教育のベテランがいらっしゃって，後でそれはこういうことだと教えていただいて納得がいけば，私の考えは撤回いたしますけれども，ともかくわからない。私たち，日本語を母語としている者は大事にするもしないも，ついて離れないものなのです。よく私

は母親と比較をするのですけれど，母親はこのやろうと思う母親でも，それは抹殺できないのです。年をとってくればくるほど，自分に父親が出てきたり母親が出てくる。そういう何ともならないもの，よく言えば掛け替えのないもの，悪く言えば運命的なもの。それが国語というもの，母語としての日本語だろうと思うのです。それならわかる。最近は，日本の学校の教室には日本で生まれて日本語で育ってきた人ばかりではないわけでしょう。外国人の生徒も同じように教室に並んでいるのではありませんか。あるいは帰国子女といって多少，あるいは大いに日本語のあやしい子供も一緒にいるのではありませんか。そういう人達，殊に外国人の子供が教室で教わるのに，目標を日本語を尊重することにおくのでしょうか？そんなことではないだろうと思います。

読み書き算盤の読み書き

私は私なりに国語教育の目標は何かと考えてみるのに，低いレベルではことばのやりとりだと思う。つまり，コミュニケーションの能力を身につけること，人のことばを聞いて，またこちらからことばを発する。ことばのやりとりをする，それが低い段階の目標。それに対して，高い段階の目標は，難しい話や難しい文章を理解して，自分の言いたいことを発表する，さらには創作をする。そういうことが私は国語教育の目的ではないかと思う。そういう目標を置けば，これは永久に変わらないです，ことばの教育として昔から。読み書き算盤といった，その読み書きが国語教育だと思います。読み書き算盤が大事だというのは本当にその通りだと思います。これだけは欠かせない，社会科の知識はなくてもいいです。英語もいいです。けれども国語，日本語というものは，数を数える，計算をすることと同等に根本的な基礎能力，どうしても身につけなければいけない，そういうものではないかと思う。そういう万古不易の能力に関わることなのですけれども，それが時代によって指導要領の目標がぐるぐる変わる。しばらく前は，確か国語愛だったと思います。「国語愛を養う」とあったと思います。国語愛とはたいへん美しいことばですけれども，これは，いよいよ何のことかわからない。その前は，私が覚えているのでは，確か「言語観を確立する」みたいなことだったと思います。その正確な文章を覚えていませんが，内容はよく覚えています。日本語には日本語のものの考え方がある。つまり日本語でしか日本人は世界が見えないのだ。どうしても世界を日本語を通してしか見ていない。そういう言語観を確立するのだということだったと思います。これならばわかります。しかし，ただそれだけでいいのかということは問題ですけれども。その前は「人格形成」だったと思います。そういう時代がありました。そのとき私はまだ若いころでしたけれど，国語教育とは大変で，数学や英語は人格形成に関与しないのかと思いました。全ての教科が人格形成に与っているのではないでしょうか。国語だけでどうして人格形成ができるのか。その当時まだ倫理という教科はなかったのですから，人格形成は全て国語におんぶする形になっている。そういうように，この指導要領の目標の，最後のところが，時代によって変わること自身が不思議なのです。時代によって変わらない，先ほど私が言いましたような，整わないことばですけれども，内容として申し上げたような，いつも変わらない事柄でなくてはおかしいというふうに。そういうふうになってきますと，もちろん今，外国人の子供や，帰国子女は，きっと少数派といいますか，教室の中で小さくなっているのではないかと思うのです。あるいは，教師も場合によっては差別して，やはり日本語で育ってきた子供たちを主体にして，後はお客さんだというような気持ちの先生も皆無ではないと思うのです。

国語教育から日本語教育へ

しかしそういうことは，もうそのうちにできなくなると思うのです。なぜならば今，日本語を学習して日本語をしゃべろうとしている人の数は膨大なものなのです。そうなると，この言語が，ただ日本人のためだけの伝達手段ではなくなるという時代が来て，教室がそういう状況でよろしいかどうかということになります。それがおそらく３分の１が外国人と帰国子女だというような時代が来れば，だいたい国語教育という名前自身もそのときは変わっていると思います。「日本語教育」「日本語の教育」と変わっていなければおかしい。「国語」はもともと「国家の言語」ということばの略でありまして，私の先輩の上田万年が，繰り返し講演の中で「国家の言語，すなわち国語は」と言いかえしておりますが，日清戦争が終わったあたりのことです。しかし，これからは国家の言語という考えを反映した用語では間に合わなくなる時代がきっとくるに違いない。そうなって初めて本当に国際化の時代が来るのだというふうに思っている。そういう時代が来ても，先ほど申し上げたような，読み書き算盤の，読み書きとしてのぎりぎりの基本的な線は消えない。むしろ意味がだんだん大きくなってくると思います。

日本語教育の明日

話が日本語教育のことに及びますと，いろんな点で今，動いている現象ですから，非常に興味があるのです。一つは，この状況はいつまで続くかということです。日本が経済的に落ちこんだとしても，なおかつその数は減らない，あるいは逆に増えるとなれば，これは本物です，日本語の学習は。もしそうでなければ，日本語というものは，ここに中国の方がいらっしゃるのですけれども，私は大連と西安しか知りませんが，日本語学習は生活手段と深く関わっているのです。だから，日本語の通訳をしたい，あるいは日本語の会社に入りたいという切実な競争社会のための道具です。このことを中国でひしひしと感じたのですが，そういうふうなものと結びついて結構ですけれども，それが中国以外ではそれほどのチャンスはありません。日本語の通訳をするとか，会社に入ることは，そんなに多くの人に与えられているわけではありません。多くのポストが用意されているわけでもありません。私たち日本人が英語を学ぶときは，ドルが上がっても下がっても関係ありません。英語はやはり勉強しなければダメなのです。それを英語の文化を研究するとか，歴史を学ぶなどという美しいことではなく，日本から外へ出れば，コミュニケーション手段として一番必要なものは英語なのです。そういう意味で，英語を私たちは勉強するわけです。英語と同じように日本語がこれからに耐えられるかどうかは，非常に注目してよいと思います。昨年でしたか，西安へ行ったときに，少し中国で日本語を学ぶ学生が減りつつあるという話を聞きましたけれど，原因については十分な説明がありませんでした。

日本語教育に学べ，日本の語学教育

日本語教育を，名古屋大学で一日通して拝見したときには，本当に素晴らしいと思いました。何が素晴らしいかというと，私が見た最初の時間，２時間目だったと思いますが，それは学生が４，５人なのです。そして先生は，その朝，提出した答案を１時間目に相当する時間に全部見て，赤を入れて学生に返しているのです。そしてそれに基づいて，いろんなコメントを先生がする，あるいは言わせる。これは語学教育として理想的です。これで日本語ができないようなら，よほどおかしいです。知

能指数100ぐらいでも大丈夫だと思いました。そのときに思ったことは，もしそれを日本の英語教育に少しでも適用したら，日本の学生はもっと英語が上手になるだろうと思います。どうして英語教育は40人も一緒にしてやるのですか。日本語教育はどうして４人ですか。ことば教育の予算は，日本人のためのものですか，外国人のためのものですか。日本人の英語が下手な理由は，いくつかありますけれども，お金をかけていないということです。そんなことを思いながら肝心の日本語教育の内容のことはすっかり忘れてしまいましたけれども，実に日本語教育の見学は楽しかったです。語学教育は，一対一では能率は上がりません。一対二では一人休むと一対一になるからダメです。10人ぐらいまで。アメリカの外国語のインテンシブコースはだいたい10人ぐらいになっております。東京外国語大学に私はいたことがありますが，そこで毎年，語学講座というのをやっております。アジア・アフリカの非常に珍しい，普通，学校で習えないような言語を，東京で２言語，大阪で１言語，３言語ずつやっております。夏休みの間ずっと通してやるのです。そのときも10人です，学生の数は。それでインテンシブで，朝から晩までやるのです。20日間ぐらいで新聞がだいたい読めるようになるそうです，どんな言語でも。外国人ももちろん来ますが，日本人も来る。語学だけでなく一般講演もやるという，そういう語学教育の実験がずっと続いております。これはアメリカのインテンシブコースのまねをしたわけでありますが，成功している例だと思います。

語学として入りやすい日本語

日本語教育について，名古屋大学が特別恵まれているのかどうか知りません，私は名古屋大学しか知りませんから。その状況のもとで，学生たちに勉強したいという強いモーティベーション，やる気というものがもしあるのならば，私は日本語を学習するということは，他の言語と比べてやさしいことだと思います。日本語でコミュニケーションをするのには，私は３カ月あれば充分だと思う。と言うと，日本語教育を職業としている人はそれでは困るという，仕事が減りますから。ですけれども，見ているところ，３カ月がいい。半年は多少長いという。それはなぜかというと，モーティベーションと環境のこともありますけれども，日本語ということば自身が実に易しい言葉なのです。話しことば，ことばを話してコミュニケーションをするための道具としては，日本語は英語に比べても，他の言語に比べても非常に易しい言語なのです。その理由は，一つは文法の例外規則がきわめて少ない。活用に変格活用が多少ありますけれども，問題にならないくらい少ない。それに文の要素が，取り替え差し替えが自由な構造でありまして，「私は学校へ行く。」でしょう。「私」のところを取って，「あなた」をそのまま入れることができる。「あなた」のときは，次に「は」が来ると，「あなとうは」とかにはならないのです。「あなた」でも「私は」の「は」と同じ「は」です。「学校」のところに「会社」がそのまま入れ替えられます。「会社」のときは「へ」ではなくて，「会社ぴ」とか何か言わなければないことはないです。あるいは「へ」のときは「会社」は「かいし」とか言うことはない。もちろん，助詞を変えてもいいのです。「私は」を「私」をそのままにして「は」を「も」に変えればいい。だから，こういう一つ一つの単語をさえ覚えておけば，あとはただそれを並べればいい，そのままただ。ドイツ語やロシア語やラテン語は，全部その格によって語形が違ってくる。日本語も，動詞は，多少そういう傾向がありますけれども，ドイツ語などではそれをいちいち覚えなければならない。日本語は，そういうわけで非常に切れ目のはっきりした言語で，ですから，覚える側からすれば非常に楽な言語です。３ヶ月でよろしいといっているのは，日本語の非常に奥深くまで行くことは考えていません。日常生活を営み，場合によって新聞の見出しくらいわかる程度です。先ほど

紹介しました，これは朝日のコラムにも書きましたけれども，私の親しいトルコ人，もう今，40過ぎになりましたけれども，彼はわりあいと年をとってからボス・フォラス大学に入って，日本語を勉強した。その先生は一人だけ，しかも聞くと，商社の奥様。だから，日本語教育の素人のはずです，明らかに。その人に３ヶ月習った，ことばを。そして彼は日本人のガイドをしているのです。私もその彼のガイドでイスタンブールを回りました。そうしますと彼は，イスタンブールの山の手と下町をつなぐ有名な橋にガラタ橋というのがあります。そこはちょうど工事中でした。彼は車を運転して，「ここはガラクタ橋でして申し訳ありません。」毎日言っている冗談かもしれませんが，それはもう全く自然に出てくる。それは，一つには，トルコ語の構造が日本語の構造と，ご存じのように寸分違わない，全くことばの順序が同じです。話すのが非常に楽です。単語さえ覚えれば。そういうトルコ語のような構造を持った言語は，世界で44パーセントあります。それに対して，英語のような構造は36パーセントです。I love you.よりもI you love.という言語の方が多いのです。44パーセントがそうなのです。だから，地球的に考えると，中国語もそうですけれど，英語のほうがちょっと変わっているのです。日本語のほうがまともなのです。統計学的には有意差がないと考えるべきかもしれません。だから，勢力伯仲と言ってもよろしい。日本人はそう考えていませんでした。日本語は変な言語だと，英語が正しい語順で日本語が間違っているのだと。だから，終戦直後，日本語の構造を変えて，「私は愛する，あなたを」という順にした方がいいということを，真面目に主張した人がいるのです。それは世界の趨勢の逆行なのです。

漢字学習は恐ろしい負担

トルコ人にとって日本語はとても楽なものですから，３ヵ月の学習で本当に，何不自由ないのです。ところが，文字はいっさい教わっていない。「どうしても文字を覚えたい。」「ガイドには漢字なんか必要ないのではないか。」「いや，どうしても覚えたい。」そして日本に留学しようとしたのですけれども，年をとっているので奨学金が出ない。彼はガイドで稼いだ金を全部ほうりだして，漢字を勉強するためだけに日本へ来ています，もう３年間になります。トルコのリラというお金は，日本円に換えると40分の１になってしまうのです。ですから，非常に劣悪なアパートをただ借りして，ある大学へ通って勉強している。３年たったけれども，漢字は1000しかできない。まだ常用漢字の全てにいかない。しゃべることばは３ヶ月でＯＫでした，素人の先生との勉強で。こちらはプロの先生のもとで，３年たって，まだ1000字。大変勉強熱心な男です。私はうちに招いたことがある。私は富士山のふもとに小屋を持っておりますので，そこへ招きましたときに，５合目まで行こうと一緒に行ったのです，車で。そしてそこからは歩いて宝永山の噴火口のところまで行くものですが，もう私はくたびれたから，彼一人で行ったのです。ときどき歩いている人の話を耳にはさんで，あれは何というのですか，小さな機械に日本語が入っていて，押すと字が出てくるのです，それを肌身離さず持っているのですね。ちょっと耳にはさんだことばを押して，その漢字を勉強する。私は76年間，漢字を勉強しました。しかし，いまだに辞書を引きます，手紙を書くとき。この前，羊羹の羹が書けなかったということを雑誌に書きましたけれども。文部省にしたがって羹だけをひらがなで書くことはできない事情がありました。それは，うちの家内が，プレゼントにアメリカへ虎屋の羊羹を送りたい，その送り状に羊羹をひらがなで書いては失礼です。漢字でどう書くのだと，私に御下問があった。上は羊とわかったけれど，下のちょんちょんと書くあたりが，最近書きませんので書けなかった。辞書を引きましたが，わからない，私の関係している辞書では，字が小さくて。拡大した太字の辞書を見ました

が，これでもわからない，小さくてわからないものを大きくしてもやはりわからない。ですから，漢和辞典をついに出してきて，やっとわかりまして。それでもあなたは言語学者か，という皮肉は言われませんでしたけれども，顔はそう言いたそうでした。このトルコ人は夢中になって今，勉強しています。時々，日本の学校が休みの時はトルコに帰ってガイドで稼いで，それを持って日本に来て，漢字のためにトルコのお金をつぎ込んでいる。

漢字かなの文章が唯一の正式の日本語だとすると，それが書けなければ日本語は書けないということになります。しかし，それは，外国人が日本語に近づくことを無意識のうちに排除しているのではないか。つまり門戸を閉ざしている。確かにその傾向があると思う。

日本語の自由化

私たちはもう少し日本語に対して，正しさ・美しさ・厳しさを緩めざるを得ないと思うのです。それを，梅棹忠夫氏は，「おぞましき日本語に耐えなければいけない時代だ」と言っていますけれども，そういう言い方をしてもいいと思う。だから，この今のトルコ人の話で言えば，「1000字は漢字で書けるのなら書きなさい」と，「あとはかなでいいのですよ」あるいは「全部かなでもいいですよ」いやローマ字で書いたってかまわないと思う。日本語は少なくとも３種類の表記がある。どれでもいいですよ。ことばさえ正しければ。こういう広い気持ちを日本人全体が持つようになれば，これこそ自由化のお手本です。大体，国際的な言語になればなるほど，一種の規範が緩むというか，だらしない格好になるわけです。英語は一番堕落した言語だと，ある人は言いますけれども，本当に何をしゃべっても通じるのです，私が何をしゃべっても。そのくらい，非常に英語は勉強のしにくい言語なのですけれども，国際語になったがために，幅が広がったのではないかと思います。規範の緩い言語，ともかく通じさえすればＯＫという言語にしなくてはなるまい。もちろんこれを，「日本語教育の教室でそういうことをしなさい」なんてことを私は言いません。そこでは，正しく美しい日本語を教えなければなるまいと思うのですけれども，現実にそれが使用された場合に，それを受け入れるだけの広い気持ちを持つべき時代が来ているように私は思います。

話しことば教育は音声を意識する

私の申し上げたいことは，国語教育はことばの教育である。他のものをしなくてよろしいというわけではないのですが，国語教育はことばの教育である。ここで言うことばには話しことば教育が含まれる。まさに話しことば教育こそ，ことばの教育だろうと私は思います。現状は，もっと前の段階にありまして，文字と音との区別がつかないのが一般的です。日本の国語辞典で発音で引ける辞書は一冊もありません。ご存じですか？　和英辞典は別ですけれども，普通の大型にしても小型にしても，国語辞典で発音引きのものはありません。例えばオーという音で始まることば，「オーサマ」ということば，それから「オーキイ」ということば，「王様」と「大きい」は，発音は同じ「オー」です。どんな日本人が発音しても「オー」です。もし発音で引く辞書ならば，それは同じところになければいけません。それをどういうふうに表記するかは別です。いずれにしても，「おー」は「おう」とは違うのだということが認識されているとは思えません。今の国語辞書は，現代仮名遣いの標準表記で引く辞書なのです。文字で引く辞書であって，発音では引けない辞書なのです。どうも日本人は今のところ，現代仮名遣いは，かなり発音に近いがために，それは音を表しているのだと考えている。助

詞の「は」というのはまさにそう。音を表していないのです。これはワ行に行かなければいけない，このことばは。しかしハ行にあります。今，『新明解国語辞典』といわれている辞書は昔，『明解国語辞典』といいました。戦争中から出ておりまして，これを最初に企画したのは，金田一京助先生だったのです。金田一京助先生は，やはり発音から，音から引ける辞書にしたいというので，「オー」はすべて「おお」と書くことになりました。最初はそれでやっていたのですが，戦後になってから，きわめて評判が悪いというのです。なぜ評判が悪いかというと，ある人が「王様」を引いて，「おう」のところを見ても出てこない。「王様」は「おお」でなければ出てこない。一回「王様」が出てこないと，この辞書には「王様」がない辞書だ。この辞書はダメだということで，出版社の方がどうしても，金田一京助方式はまずいと，だから世間一般の非発音，つまり標準かな表記引きに直してほしいということでした。金田一京助案を変更したという歴史，私はそれに立ち会っております。ですから，音引きの辞書が計画されない，またそれが受け入れられない，そういう風土があるのですけれども，話しことば教育といえば，やはりその音を意識して，それを適当な方法で処理するということがなければいけない。

素人の自信

以上，私の考えていることをお話ししたつもりでおりますけれども，おそらく現実の国語教育界では「それは素人の素人談義である，そんなことはとうてい受け入れられない」という答えが返ってくると覚悟の上であります。しかし，そう言っておりますと，いつまでたっても事態はよくならない。私は理論的には通っているという自信を持っておりますけれども，そこへ時間をかけて近づく。例えば，もし将来できれば大変うれしいと思っております。

第２節　柴田武先生との話し合い

甲斐ム　今，柴田先生から，ことばの教育，正確には国語の教育のあり方について，いろいろとご指導いただきました。これから40分間ほどですが，先ほどのことに関連して，あるいは別のことでもいいですけれども，ご質問等があったら皆さんから出してください。

柴田　質問をいただくときに大変申し訳ありませんが，ご覧のように私はこちらの耳が，録音をあまり聞きすぎたのか遠くなっておりますので，みんな国語の先生でいらっしゃるから，正しい発音で少し大きめの声でやっていただくようにお願いいたします。

日本語の習得は８週間で可能

水谷　では，質問でなくて申し訳ないのですが，先ほどの日本語教育のことですけれど，先々週から方針を変えまして，いろいろな方とお話をするときに，氷河期時代に入った日本語教育という，冬の時代に入ったということで始めているのですが。昨年の，国際交流基金の海外での学習者の統計の中では，中国の学習者は減りました。過去の30年の日本語教育の歴史の中で初めてのことです。他の国は増えているのですが，それは調査の回収率が上がっている分で増えているので，全体とし

て結局下がり目に入ってきた。それから昨年の留学生の数も減りました。文部省の狙っていた10万人構想は，なかなか実現が不可能になり始めたようです。この辺はお金の関係があります。それに伴って，日本語の能力試験を受ける人の数も国内では減りました。これらのことは，さっきも言いましたように30年の歴史の中でも初めてです。だから逆に言えば，今，本当のあり方が問われるという時代に入っているのだというように，実際上，先生が心配していらっしゃることが，現に起こり始めていると思います。中国の場合は，ビジネス関係に結びついてニーズが高いのですが，学校教育の中では減ってきている，一体それがどうなるのかという課題があります。それからもう一つ，３ヶ月で充分だとおっしゃっていましたが，私も大賛成であります。経験的に言って自分自身，あまり外では大きな声で言わないようにしておりますけれど，内心では，８週間プラスアルファで基礎はできる。学習者の能力，適性がありますから，それが平均的なものであれば，非常に弱い人は別であるのと，偏見のある人は別ですが，そうでなければ８週間プラスアルファ。と申しますのは，８週間くらいは，個人差はもちろんありますけれども，持続するのですが，壁に一つぶつかりますので，そこまでの期間は目一杯できるということと，プラスアルファの分は，さっきおっしゃいました二次的な要素の分も，実際にことばを使うためには必要ですので，それへの橋渡し，戦略，ストラテジーを与えておく必要がある。それは，繰り返してことばを使うとか質問をするということで入っていける。その方法さえ入っていれば，あとは時間の問題ですから，そこまでを含めた基礎的なものは，やはり８週間プラスアルファだと思っております。もしそれができないとすれば，学習者の前提が平均的であるということを除いては，教師が無能であるか，あるいは教育の体制がよくないかのどちらかである。

柴田　それは主として話しことばでしょう。それは，私が経験した二つのことと結びつくのですが，一つは，今もそうだと思いますが，東大の工学部で，15年以上前の話ですけれども，日本語を知らない留学生を１年間まず日本語を勉強させて，そして工学部へ呼んだのです。しかし，１年間というのは非常に悪影響があったそうです。その間に，エンジニアリングそのものに対する興味が失せてしまう。あるいは勉強していきたいというものが押さえられて，日本語の文法ばっかりやっている。そこで，私は東大をちょうどやめるころでしたけれども，工学部の中に日本語講座を作ったのです。その人選のことで私は相談を受けたことがあるのですが。そして最初から日本語も教えながら，実際にエンジニアリングのことも教え，わからないまでもどうせ３分の１くらいは英語でしょうからそれでやる，あるいは学生たちからそういう知識を得る，そういう方法に変えたことがありまして。その後，変更したという話を聞きませんから，きっと続けているのでしょう。

それからもう一つ，こういう経験もあるのです。どんな言語でも，どんな外国語でも，１ヶ月あれば日常生活には困らなくなるはずだ。つまりやる気があって，それからもう一つは，奥さんも連れていかないこと。日本語をしゃべらない環境を，これはかなり困難ですけれども，意図的に作る。奥さんを連れていかないくらいのことは楽ですけれども，日本人とのつき合いを絶つということは，非常に難しい状況が方々にあります。もしそれができるならば，１ヶ月あれば毎日の生活に困らないところまでは行くでしょう。昭和18年，私はまだ大学を卒業した翌年でしたけれども，モンゴルへ行ったときに経験しました。今だから申し上げますけれども，その当時スパイの養成をやっていたのです。それでモンゴル語，その当時は蒙古語と言いましたけれど，モンゴル語を教えてシベリアや中央アジアへ放とう。昔の中学を出たばかりの若者が厚和というところにいたのですけれども，モンゴル語の学習はいっこうに進歩しない。ある時学校の計画で，子供たちを蒙古部落というか，いわゆるパオに一人ずつ配属したのです。もうほとんど何もしゃべれなかったのですが，１ヶ月後

にわれわれは行ったところ，彼らはモンゴル語がペラペラなのです。その当時の私の蒙古語などではもう，とても及びつかない。このことから考えると，１ヶ月間でも，やる気のある者を極限状態に置けば，大川周明あたりの思想に共鳴してきた連中で，語学能力があるかどうか知りませんけれども，ともかく成功する。聞いてみたら一番最初に困ったのは，水がほしくて，水ということばが出なくて困ったという。蒙古はご存じのように水がない。飲みたくなるでしょう。もちろん水というのは「ウッス」と言うのですが，そのことを思い出してくれればいいのだけれど，それをみんな忘れていた。その水ということばがなんとか通じて，「もうこれは，私は一生忘れません」と学生たちは言っておりました。そういう極限状態に置けば，ちょうどそれは１ヶ月ではなくて，正確に言うと，21日目か22日目に行ったのですけれども，言語は１ヶ月でもかなりのところまで行ける。やる気，環境，それからインテンシブな学習。今の語学教育は，それを言うと全くダメです。一週間たって忘れたころにやってくるのです，授業は。そして，夏休みは完全に忘れて９月です。そうするとだいたい語学の場合は，学生はそこで半減します。そこを続けられる者はあとも続く。そうではなくて，アメリカみたいにワンセメスターというような，集中して一週間に２回，同じ先生の授業をやる。そして３ヶ月くらいで一つを上げてしまう，ということをして集中してやる，そういう態勢がとれなくはないと思うのですけれども。だから８週間プラスアルファというのは，さもありなんと思います。

少人数生のクラスを作る

水谷　今の，言語投資というか言語教育への投資，あるいは言語教育観の問題だと思うのですが，その名古屋の場合の４人でしたか，その数でやれることについての理解は日本の中にはほとんどないのです。その少人数制のクラスを作るために，ものすごい戦いをしました。

柴田　では名古屋大学は特別だ。

水谷　はい。文部省の方も，もちろんいい教育はやってほしいけれども，制度的には外国語教育で40人50人という過去の伝統があるわけです。そこをどう突破するかということではずいぶん苦労してくれたのですが，結局もう一つ経済的な理由もあるのですけれど，少ない人数で授業を多くやるということのためには，お金がなければできない面があります。そのへんの理解が，むしろ文部省の関係のある役人の方が理解があって，大学にはなかった。外国語教育の先生方からの反発がものすごく大きくて，だからことばの学習に金がかかる，エネルギーを一見，見せかけでは使っても，結果を計算すれば効率的だというような発想が全くない。今，各大学でみんな困っているのではないか。多分それは国語教育に関連しても，ある要素については，人数を限るとか集中するというような発想がないと，先ほどちょっとおっしゃいました，一品料理の羅列という方向へ行かざるを得ない。目的主義や達成感をどう大切にするかという考え方を何とかして用意していかないと，意味のある仕事ができないのではないかと，お話を伺って感じております。

柴田　国際基督教大学もそうでした，５，６人でした。同じ教材を，朝読んで解釈して，文字を書くところまで，ずっと一貫してやるという教育で，なかなか面白いと思って見ていたのですけれど。そうやって国際基督教大学で教育を受けたものが今，世界中で頑張っている。

水谷　損ではなかったです。

柴田　ＯＤＡでずいぶんお金を使っているようだけれど，そのことを思えばたいしたお金ではないです。

方言の尊重と地域別指導書

寺井　小学校の文字教育の現状ということで，センタクとセンダクの例を使いながら，ご説明いただいたのですけれども，そういうことになると，教科書は今，全国区の教科書で，一つのもので日本中に通用させている教科書になります。もし先生のような，センタクとセンダクが生きる教育をするためには，教材，あるいは教科書の問題は，地域の特色に応じたものが必要になるかと思います。そのことに関して，教材の多様化に関して，先生のお考えがあればお聞かせいただければと思います。もう一点は，方言を尊重することになってくると，テレビやメディアが発達しまして，私の田舎は徳島でございますけれども，そこでも，昔のような方言だけの生活ではない。子供達の言語生活もそのようになっておりますから。そういう状況をふまえた時に，どのような教育の姿になるのかということの二点について。

柴田　そうですか。最初のセンタクの例でいいましたが，現実に各地の，理想的には県単位や地域単位の第二次指導書ができればいいのですけれども，現実には全国区の教科書には「センタクに行きました」とある。そこで教師の教養なのです，ことばに対する，ことばについての。徳島だとすると，おそらくほとんどの子供はセンダクと言っているはずです。「君たちはセンタクと言うかい？センダクだろう！じゃ，教科書にどうしてセンタクと書いてあるんだろうね」こんなことを語りかければ，子供も乗ってくるし，徳島はセンダク，東京はセンタクのように比較ができれば大変な方言教育になる。子供たちも目を開かれるだろう。30人が目を開かれれば，一人くらいは言語学者になります。いま教室では，センダクということばを話題に出すことが，憚られるような空気があるのではないですか。そんな汚い，恥ずかしいことは，口にしてはいけないというのが学校の教育環境です。一定の指導書にしたがって授業をする，その段階の外でやることになります。ちょうど高等学校で文学の好きな先生が，例えば俳句の好きな先生が，たくさん俳句をプリントして，教室でとりあげる。他のものをやればいいのに，俳句を一生懸命教えている。それはその先生が俳句が得意であるからする，それはそれでいいのです。それと同じに，ことば教育ですから，全部の国語の先生がことばについては専門家でなければいけない。そしてどこにその人の興味があるかは，いろいろ別でしょう。今はわかりやすいセンタクだけで言いましたけれど，文章の組立に興味のある先生はそれをおっしゃればいいわけで。どうして，「むかしむかし，おじいさんがいました。」を，「むかしむかし，おじいさんはいました。」となぜ「は」と言わないのですか，というような高級な問題もあるわけでしょう。そうするとみんなは変だと。なぜ変だろう，それを完全に説明することは今の学者もできませんけれども，変だということを聞くと，「は」と「が」は違うのだということに気づかせるだけでも，大変な教育ではありませんか。ですから，何が良い，何が悪いを指導書として書くことはできないと思うのです，現実には。しかも教科書が絶えず変わるでしょう。これが困るのです。まだ教室で一回も使ったことのない教科書の改訂をやらなければいけない。だから，これをもっと長く使って，そしてここを直した方が良いという教材の取り扱いをすれば，心ある人が地域別指導書をお作りになれると思います。けれども，今のようなめまぐるしい，週刊誌を編集するような教科書編集では，ダメです。それから，方言のことですけれども，先ほど私は慎重に言いましたように，方言というと，最初から終わりまで全部方言に訳したような，誰も話したことのないような，明治時代からの材料を全部そこへつぎ込んだようなものが方言だというように，皆さんはお考えになっている。そうではなくて，使っている普通のことば，だから今，徳島ではセ

ンダクといっている，それは方言なのです。それを使ったらどうですか。単語はいいのですけれども，その土地の言い回しがある。そうすれば子供達はのってくるでしょう。「あかん」と言ったら，「いけません」という東京弁でやるよりも，子供は「先生，わからへん」と言って応じて来るかもしれません。それで良いのではないでしょうか。教科書に書いてあることはその通りにやらざるを得ませんから，やればいいのです。全て先生方のかまえ，あるいは意識，知識に私は期待して申し上げているわけです。

国語教育に求めること

多門　私は国語教育の専門家ではありません。今日の先生のお話は，中央と地方の対立，それから読み書くと話す聞くの対立，それから文学，芸術のことばと話しておられて，それぞれ後者の方を復権させようというのが，今の主流と言うほどでもないですけれども，水谷先生が目指されている方向だと思うのです。つまりそれは，今ある国語教育にそういう新しい内容を盛り込んでいくというか，ようするに新しい内容を拡充していく方向で国語教育を変えていこうという考えです。そういった場合に，盛り込むことは改革になると思うのだけれども，それこそ，そういう新しい情報を教えなければいけないと入り込んだときに，先生がご批判なさったアラカルト方式というか，一品料理がいっぱい出てくるというような内容のものができてしまった場合に，どうなるのかという感じがあるのです。僕はたぶん今の国語教育ではまずいのだ，少し話しことばのこともやろう，地方のことばもやろう，実用的なこともやろう，という持ち込み方をしていった場合に，果たしてそれが成功するのかと。もう少し言うと，国語教育ということにそういうことを全部やらせる，機能負担を増やしていくと，国語教育というものが内部的に爆発して壊れてしまうのではないか。先生は，外国人が増えてくると国語教育というものは，日本語教育になるのだということをおっしゃったけれども，それより以前に，内部分裂を起こしてしまうのではないかと思ったのです。そしてこれは，柴田先生にも水谷先生にもお聞きしたいのですけれども，話しことばの能力，コミュニケーション能力をつけるということで，それを入れても良いと思うのです。高度なところでは，例えば柴田先生がおっしゃったようにディベートをすることや，あるいは何か論理的な説明をすることになると思うのですけれども，具体的に小学校の子どもにコミュニケーション能力をつける，やりとり能力をつけると考えたときに，一体何をやるのかということです。例えば，現場の先生が話しことばを少し頑張らなければいけない，コミュニケーション能力を子供につけなければいけない，一体何をやるのかというところで，具体的なイメージが全然見えてこないのです。そこのところを柴田先生にも聞きたいし，水谷先生にも，一体何をやるのかを教えていただきたいと思います。それがまず一つ目の質問。

それから二つ目の質問で，地方の復権というか，方言の復権に関わるのですけれども，例えば柴田先生はドイツの話を持ち出されて，その土地でその方言が喋れる人が教師の資格があるということをおっしゃった。それはとても良いことだと思うし，日本でそのようなことになるかどうかわかりませんけれど，かりに例えば僕が，僕は静岡の人間なのですけれども，名古屋の学校に就職をしたくて，名古屋の方言を頑張って習得しようとします。とても似非方言だと思うのです。子供は教師を見て面白いと思うのは，たぶん大阪弁で授業をする先生であったり，東北弁で授業をする先生であったり，やたらな先生がたくさんいる方が，似非方言をしゃべる先生が一人いるよりも，面白いという感じがします。質問になっていませんけれども，そういう多様性を許すところでの，地方

という考え方もあるかと思います。特に第一点目について，柴田先生と水谷先生に答えていただきたいのですが。

文学の授業について

柴田　今の教科書の編集方針ではできません。ですから，私のお話ししたことに関連して言えば，「何々と思う」「何々と考える」というセンテンスがあれば，いま「思う」「考える」ということばを使わないでおいたらどうなるか，とやってみるわけです。あるいは文章を書いても良いでしょう。これで「～と思う」と「～である」の違いがわかって，やたらに「～と思う」を使わないでもすむことを納得させる。文学の方でもそうだと思うのですけれども。文学そのものを教えることは，本当はできないでしょう。文学を習った人が作家になっているわけではないです，絵を教えられないのと同じで。文学はなんのために教えるかということは，私は議論に加われませんけれども，別なことにあるのではないでしょうか。人間を考える，人生を考える，そういうような易しい道なのです，哲学のものを読むよりは文学を読んだ方が，人間の機微がわかる。面白い話があるのです。橋本進吉という，私の先生で国語学者の先生が，ある時，授業ではありませんが，「修身は全部文学にしたらどうだろう。」とおっしゃったのです。これはなかなか良いのです。しかしゆっくり考えると，その文学を，今の国語の先生がやるように修身の先生がやったらお手上げです，いちいち，これはどこにかかる，その漢字はおかしいとやっていたら。だから橋本先生がおっしゃったのは，ことばが自由に理解できるということを前提にした上での話なのですけれども。文学は一つそういうことにあるのではないでしょうか。全ての子供に共通の要素です。私は若ければ中学の免許状があるのだから，どこかでやらせてくれないかという気が少しします。それは自己を試すことでもあるのではありませんか。皆さんは自分のことばが中心ですけれども，試すことできっと失敗すると思います。ではこの次はこうと自分を知るわけです。だからそのセンタクとセンダクの区別は，先ほど言いましたように，大学に入ってから気がついた区別です。そういう区別を知らないものも，いっぱい私は持っています。水谷さんは教師だからそんなことはないかもわからない。私は最近まで「すっ裸」と「まっ裸」と，どう違うかがわからなかった。辞書を見ても全然わかりません。同じ語釈が与えてある。一つはサ行で一つはマ行というのは，いよいよダメだと思います。それをよく考えたらわかるわけです。しかしこれは70才を越えて初めて気がついたのです。そういう例は，まだまだいっぱいあるような気がします，そういう違いは。それを気づかせることがことばの教育ではありませんか。わかりやすい例で単語ばかり言っていますけれど，もっと文章の組立全体も含めて，例えばセンテンスを短く，という一つの主張がありますけれども，ではこの文章を短いセンテンスに書き直したらどうなるか，長くしたらどういうようになるのか，ということをやってみる。そして，短くした方が子供が賛成しないかもしれませんけれども，はっきりするのではないか。こんな大変なことを学校時代に教わっておけば良いのですけれども。私は自ら獲得した原理で，短くということがいかに大事なことか，つまりもののわかっていない間はセンテンスは長いのです。ですから長いセンテンスはわかっていないのです。自分でものがわかればわかるほどセンテンスは短くなる。あるいは短いセンテンスのつながりになってくる。そういうことを本当に実感していますので，したがってそれは，態度をはっきりさせるということで責任を持たせるということでもある。政治家のセンテンスを見てご覧なさい，長いから。何を言っているかわからない。それは政治家の言語ですから，学生がそれに応じる必要はないと思いますけれども。そうではなくて，わかりやす

い文章というか，わかりやすいものの見方ということであれば，短くすることです。

話しことばと書き言葉で

それからもう一つは，話しことばと書き言葉で，皆さんはこうお考えになっていると思います。書きことばが基準であって，話しことばは崩れたもの，間違ったもの。これはヨーロッパでも，19世紀の終わりには言語学者もそう考えていました。だから現代語の研究はもってのほかであるという考えがあったのです。私はその全く逆を考えております。話しことばにこそ，ことばである，書きことばはそれを整えたもの。つまり話しことばは場面や文脈があって，例えば私が自己紹介をして「柴田です。」こう言うと思います。「私は柴田です。」こうは言わないと思います，普通の場面で。しかし，書きことばの場合は，「私は」と入れないと場面がはっきりしない。あなたかもしれないから，それで「私は」と入れる。だから，書きことばは整えた，手を入れた，人工的なことばが書きことば，話しことばはそれこそ，本当の気持ちが出てくる自然のことばだと。だから，話しことばで一旦出したことばは，取り返しがつかないのです。国会でもそうでしょう。「間違っていました」と訂正すると，その「間違っていました」という話しことばは何らかの形で残ってしまう。速記録に，あるいは人々の記憶に。書きことばは消せばいいのです，手を入れればいいのです。話しことばにはそれができない。ですから，話しことばには本当に本音が出る，話しことばは本心を表す手段だと，その機能から言っても私はそう思うのです。こういう逆の発想は，かなりの言語学者は持っております。上智大学にクラークという神父さんがいるのをご存じかと思いますが，お書きになったものはよく読んでいますが，大変面白い方のようです。私はお会いしたことはございません。その方が名古屋のある大学で講演をなさった。そして，その講演の速記が，特別の意図があったと書いてありますが，編集者がカナダ人の社会言語学者なので，その録音をほとんどしゃべったまま文字にしようとしたらしい。驚きました。ひとつとしてセンテンスらしいセンテンスがありません。つまり，単語の羅列みたいな日本語なのです。ところが，人を笑わせているんですね。こういう日本語で。主語述語のはっきりした文章をしゃべっても笑いを呼ばないものと，どっちが話しことばとして上等でしょう？　話しことばはそういうものだと思うのです。それは文字だけですから，どんな表情でどんなしぐさで，それまではわかりません。私がその記録を読んでうれしくなったことは，これは英語もこの調子でやれば楽だと思ったのです。単語で良いのです。的確な単語さえ適当に並べれば，単数複数の区別は必要ですけれども，現在完了とかなんとかむずかしいことを言わないでしゃべればいい。英語をしゃべる勇気を与えられました。その記録を私は大事にしています。今日の私の話が，文字にされたら，それはひどい日本語だと思うのです。それを，文字に直すときはどんどん直すと思うのです。だから，話しことばは支離滅裂だ，書きことばの方がきちんとしている。そうではないのです。書きことばは整っているものだから，よそよそしい。読本の「春の花，青い青い」実に白々しいではありませんか。そんなことはだれも口にしないと思います，話しことばでは。

ことばの教育がどうあるべきか

水谷　いいですか。国語教育の中で，ことばの教育がどうあるべきかということに関してのある考え方が出ている。それについて，それが出ると混乱を起こすのではないかという心配であったと思うのですが，実はそのテーマ自体がこの研究会のテーマであって，これから理想的なあり方は何で

あるか，何を解決しなければならないか，問題は何か。ということは，そう簡単に出ることではないと思うのですが，それがテーマであろう。ただしそれは，将来こうあるべきかということではなくて，既に実は，柴田先生が触れてくださったような内容の問題，ことばの位置づけの問題，あるいは話しことばの重要さということが，今ある指導要領に出ているのに，それができていないという現状がある。それは何とかして解決しなければならない。おそらくそういうことを考えていくことが，ここの仕事でもあり，日本中の課題だとも思うのですけれども。例えば個性を尊重する教育，一人一人を大事にする教育を，一つのテーマとして掲げていながら，現実にそれができないことがあるらしい。そういったことを，根本的な問題を考えていかないと，解決の道は見つからないのではないか。教員養成のあり方，教科書，個々の別の問題もあるけれど，それらをくくる大きな理念を，きちんとしておかなければいけないと思っております。

甲斐ム　ありがとうございます。お願いしていた時間が来ました。柴田先生には今日は，ことばの教育の根本的な問題提起をしていただきまして，我々もいろいろと考えないといけないことを，いくつも教えをいただきました。私どもの希望としては，このチームの顧問になっていただいて，また色々と教えていただければと思っております。私は今日の先生のお話は，本当だと思っているのです。違和感なく本当にその通りだと思って受けとめました。我々は未熟ですけれども頑張りますので，ご指導いただければと思っております。どうもありがとうございました。

柴田　　失礼しました。